踊り抜く系譜実になり



中原諷人 追悼誌上大会 遺句集

主催 川柳塔鹿野みか月 / 協力 川柳塔おきなわ準備室

# 中原諷 人追悼誌上大会

## お礼のことば

見かけたのは実に二十年振りの事でした。やがてお母さんの汲香さん、奥さんのみさ子 さんも入会され、川柳一家として活躍されるようになりました。 第一回川柳教室を開いたのが始まりです。この時そこに座っていたのが諷人さんでした。 さん、三代土橋螢さん、そして現在の盛桜と、みか月の土台を支えて頂きました。 身体の障害を抱えながらの川柳活動でしたので、多大な苦労が有ったと思いますが、 みか月の設立は昭和五十四年十二月の事で、勝谷農協二階に二十一名の参加を得て、 当初から、事務局長として携わって来られ、初代会長飯田蚊眸さん、二代山下以草夫 中原諷人さんが亡くなられたのは、平成二十五年四月の事でした。

会になったと思います。ご支援を感謝申し上げます。 年いわて大会入賞「一番重い水甕だいて生きている」から採りました。実りある誌上大 平成十一年国文祭ぎふ大会文部大臣奨励賞「花になり実になり踊り抜く系譜」、平成五 今回の誌上大会には沢山の方々にご参加頂き、誠に有難うございました。今回の題は、 川柳と出合った事は幸せであったろうと思います。

の川柳感・川柳眼に接してみると、人間の心底に切り込んだ句が多いように感じます。 遺句集は、みさ子さんに厳選して頂いた二百七十句を載せております。諷人さん独特

只、 最初からそういう句を作っていた訳ではなくて、勝谷農協での句を見ると

職も無く金も無いので炬燵抱く

腹立ちの辞表机にそっと置き

忘却の恋がくすぶるクラス会

有難や母の鞭からぐれもせず

靴音でわかる女房の胸の内

などが見えます。しかし程無く

耳の闇にやがては海が囁くよ針消した時計に生命刻まれる

孤人さんの人生に多大の影響を与えた事は間違いのない事実であり、生命を永らえる糧 というような句が出て来るので、諷人流の素地は既に培われていたと思います。川柳が

になったと信じております。

最後に、今回の企画段階から携わって頂いた川柳塔おきなわ準備室さまに感謝申し上

げます。

平成二十八年九月

森山盛桜

### 思 V 出

諷人さん、天国でも川柳を作っていますか。

口喧嘩の相手がいなくなり、寂しくなりました。オーイと呼んだら返事をしてくれま

みか月で光る諷人と言う蛍

すか。

弓削川柳社

灰 原 泰 子

重かったでしょうとみさ子さんに言われたが、覚えていない。 か。)じゃー急がなきゃ!と、私が抱っこして駆け上り、電車の中へ無事セーフ。後で、 の電車に乗りたいのだと階段を上って来られた。(その頃はエレベーターも無かったの 諷人さん、色々楽しかったですね。 諷人さんとは長いお付き合いでしたね。 二十年位前のこと。和歌山の大会に行く時、偶然に大阪駅構内でお会いしました。今

いずも川柳会 松 本 文 子

諷人さん、あなたとは川柳塔みか月が生まれる前から、柳友としてとても良き仲間で

したね。

「諷ちゃん」と呼びかけても、何もかえってこない今の淋しさは、とてもたまらない。

「諷ちゃん、早すぎたよ…」と心の中でいつもつぶやいています。

でも、思い出の中には嬉しいこともありましたね。あなたは第八回国文祭岩手にて

一番重い水甕だいて生きている

の様に思われます。いい句を残しましたね。 この川柳で会長賞受賞、私も同時に受賞して、共に喜びを分かち合った事が昨日の事

そちらでも川柳を作っていることでしょう。私も一句諷人さんに贈ります。 水甕の水を私も守ってく

きゃらぼく川柳会 政 岡 日枝子

諷人さんと初めてお会いしたのはいつだったかはっきりとは覚えていない。

いた。小さな私にとって、諷人さんのそのエネルギッシュなオーラは強烈な印象があっ 私が小さい頃は諷人さんもお元気で、よく実家を訪ねてくださり、可愛がっていただ

感じている。 さんの句は全く知らなかったが、川柳を始めてその句に触れ、改めて諷人さんの凄さを た。大きくなるに従い、体調の問題もあってか、お会いする機会は減っていった。 私が川柳を始めたのは諷人さんが亡くなられてから一年ほど後のこと。それまで諷人

父と共に、諷人さんが正に心血を注いで目指したことを実現する、それが私の使命だ

と思っている。

川柳塔おきなわ準備室 森山文切

### 参加者 (都道府県別·敬称略

【北海道】

伊藤 寿子

茨城県

毛利 由美 • 岡 本

恵

東京都

山田こいし

【神奈川県】

坂本 嘉二

石川県

藤村 容子・倉下 真澄

三重県

【滋賀県】

橋倉久美子

大橋 啓子

「京都府

伊藤 恒 西山 竹里・奥山

晴生·森田

西ノ坊典子

【大阪府】

古今堂蕉子·宇都満知子 水野 黒兎 ·山本希久子

たもつ・石田ひろ子 油谷 克己 山岡富美子

前

宮﨑シマ子・鶴田 遠野 谷口 義 上嶋

幸雀

西出

楓楽

太田扶美代・赤松ますみ・岩佐ダン吉

森中惠美子

【兵庫県】

遊谷さくら·沢辺 亮月· 岡部良美枝・竹内みさ緒

長浜 美籠 萩原 典呼 宮崎咲貴子・細田

三男・久保田千代・萩原

狸月

奈良県

渡辺

富子

板垣

孝志

米田

恭昌

・飛永ふりこ

大久保真澄

#### 和歌 Щ 県

三宅 保州 辻内 次根 古久保和子・ 楠見 章子

鳥取 県 木本

朱夏

北野 斉尾くにこ・ 山下 加島 蟹郎 修 竹村紀 土橋 の治 谷口 福 西

次男

森

伊藤

寿子

木下

草風

神原

日出夫

妻子

千代 実満 平尾 松永 まさと・ 林造 吉野 影井 ま Vi さお つ子 山 岡﨑 中

八木

山口

満

螢

美

知江 茶子

丸山 河原

康子

小澤

竹森富 西浦 久江 小鹿 加藤 Ш 根 八重 永子 西川 高 H 羅奈 和子 石谷美恵子  $\mathbb{H}$ 中 天 翔

成田 雨 奇 山 野 す み n 吉田 弘子 若林みどり

新家 完司 西村 久江 西原 艶子 奥山 春 雄

髙

原

か

おる

牧野

芳光

Ш

本

惠

山

下

凱

柳

野村

鴨

田

昭

紀

岩本

笑子

田中

敬子

吉田 竹信 照彦 門脇 かずお 池澤 大鯰 . 小谷美ッチ 福 永ひ か n

孔美子 幸恵 上 H 宣子 Ш 下 京

酒本

島 根県

岸 桂子 松本

文子・

仲田

美千代

内

田

厚子

岡 Ш 県

ふみか 灰原 泰子 永見 心咲

> 丸橋 小林

佳子 野蒜

玲

華

千壽 威 青 大家 恒 弘都三子 風太 松田 市 鶴邨 龍彦 奥田 片 Ш

誌 津 子 平 Ш 三鶴 池上 英之 Ш 本 久月

佳

余子

H

賀

和

7

藤井 杉山 智史 静 . 菊 元 誠 忠 畑

広島県

福 岡県

松田

栄香 賢悟

小

島

蘭幸

奥 正之

佐賀県

山口 高明·真島

長崎県 清弘·真島美智子·真島久美子

花澄・佐伯さくら・三瀬清一朗・松本

宏子

矢坂

中村 忠夫·永石

[沖縄県]

珠子・松﨑 竜人・才木 八郎

多良間典男・大田かつら・森山 文切 高良 秀光·渡嘉敷唯正·島尻

卓・崎山とし子

(以上百五十一名)

## 入選句

_		種か実か毎日食べているお米	野村	賢悟(広島
一 第 二 森中	彩中惠美子 選	益荒男はピリッとせよと山椒の実	吉野い	吉野いさお(鳥 取
真実を語る諷人との時間	小林 妻子(岡山)	実南天風が私を産み落す	田中	敬子(広島
みか月に花を咲かせた立て役者	山中 康子(鳥 取)	青春はなかった僕も無花果も	福西	茶子(鳥 取
実直な人だ両手が温かい	北野 満(鳥取)	実だくさん汁も小言も母の味	永見	心咲(岡山
梨も柿も笑顔で待っている鹿野	山本希久子(大阪)	自然界果実はまるいものばかり	楠見	章子 (和歌山
実のならぬ花がこんなにうつくしい	澁谷さくら(兵庫)	暑気払い先祖の梅に助けられ	西川	和子(鳥 取
巡り来る実りの秋を待つ我が家	島尻 卓(沖縄)	どんな実も発芽の意志を持っている	八木	千代 (鳥 取
恋もまた実りの秋の贈り物	渡嘉敷唯正 (沖 縄)	ソプラノで笑ってるのがサクランボ	森田	律子(京都
えんぴつに実る魂拾ってた	倉下 真澄(石川)	丁寧に丁寧に詰め桃出荷	矢坂	花澄(長 崎
現実には遠くて胡麻を擂っておく	萩原 典呼(兵庫)	米寿まで生きると八十路柿を植え	奥	正之(福岡
木の実たわわ動物たちのお祭だ	山下 京(鳥取)	実を結ぶはずだと明日を待っている	太田井	太田扶美代(大 阪
桃の実が流れ古里胸を張る	真島美智子(佐賀)	梅桜ワタシ好みよ花も実も	山本	惠(鳥 取
どんぐりのどの実切っても金太郎	伊藤 寿子(北海道)	花よりも食える実のなる木を植える	成田	雨奇(鳥 取
マンゴーより熟れたアタシはいかがです	大田かつら(沖縄)	海の色を愛す蜜柑山の黄色	大橋	啓子(滋賀

無花果が熟れるアダムの昔から	トマトにはトマトが出来て恙無し	大好きな町やまももが熟れている	胡桃割る十八歳の選挙権	木の実降る残り時間は正確に	実印を男の顔で押している	永田町で買った木の実が芽吹かない	一粒の種を実らす日よ水よ	焦燥の叫び椿の実が固い	神様の果実ときどき毒が有る	実をつけてやっと私の役終える	利発そうな脳味噌がある胡桃の実	枇杷の実の無くなる頃に鳥も消え	寄り添うて家族のかたち石榴の実
木本 朱夏(和歌山)	岡本 恵(茨城)	赤松ますみ(大阪)	古久保和子(和歌山)	小島 蘭幸(広島)	多良間典男(沖縄)	灰原 泰子(岡山)	岸 桂子(島根)	辻内 次根(和歌山)	丸橋 野蒜(岡山)	松本 文子(島根)	木下 草風(岡山)	石田ひろ子(大阪)	小澤誌津子(岡山)
余生まだ梅もらっきょもニンニクも	《軸吟》	実の生らぬ木にもしっかり水をやる	《天》	婚姻届を出しに行くさくらんぼ	《 地 》	赤い実を食べた男と女です	<b>《</b> 人 》	人間の森禁断の実が熟れる	青い実のまま母となり父となり	手の届く場所で実のなる優しい木	実らせ給えと焼酎飲んでいる	宝石を抱く淋しさか柘榴の実	《客》
ニクも		やる		ほ					ŋ	水木			

		実	名	神	雑	晩	貧	結	実	汚	無	父		実あ
	-	のおもい	を捨てて	様の果実	早の電光	字が実	之も今は	美へ汗に	態は知る	染された	化果が飲	の樹を採	めればら	7
実	9	が旅立の	社の	夫ときば	尤石火	り生きば	は実らな	にまみ	る人ぞの	た果実は	烈れる?	揺すれば		虚もある
_		実のおもい旅立つあすにする覚悟	名を捨てて社の生き残り実を取る	神様の果実ときどき毒が有る	雑草の電光石火実を零す	晩学が実り生きがい永らえる	貧乏も今は実らぬ子沢山	結実へ汗にまみれた跡がある	実態は知る人ぞ知る軍事力	汚染された果実は熟れたまま腐る	無花果が熟れるアダムの昔から	父の樹を揺すればぽとりヒントの実		れば虚もある二人夫婦です
恒弘				34	<b></b>		_		v					
衛 山	循口	竹森富久江(鳥	佐伯さくら (長	丸橋	真島	北野	宮﨑咲貴子(兵	奥田	山岡冨美子(大	平尾まさと(鳥	木本	渡辺	伊藤	j
選		江(鳥		野蒜 (岡	清弘(佐	満(鳥		佳子(岡	子 (大	ひと (鳥	朱夏(和歌山)	富子(奈	恒(京	
		取	崎)	问	賀)	取	庫	山	阪	取	山	良	都	
実話ですと狼少年ムキになる	実も蓋もない話にはさせぬ意地	真実を語る諷人との時間	実を食べる小鳥も遊ぶ山桜	実直な母呑兵衛の父その倅	天才は虚像実像増刊す	実印を押す人生の分岐点	迷ってる実はあんたが蒔いた種	試行錯誤やっと実った机上論	益荒男はピリッとせよと山椒の実	永田町で買った木の実が芽吹かない	手の届く場所で実のなる優しい木	酔芙蓉自分丈酔う実の無さ	花は実をひと科は禀とDNA	不に与えてる利は、
木下	油谷	小林	神原口	谷口	山口	毛利	岡崎	松本	吉野	灰原	橋倉	吉田刀	平山	
草風 (岡	克己(大	妻子(岡	神原日出夫(岡	次男 (鳥	高明 (佐	由美 (茨	岡﨑美知江(鳥	宏子(長	吉野いさお (鳥	泰子(岡	橋倉久美子 (三	吉田孔美子 (鳥	三鳴 (蜀	有作
Ĥ	阪	Ĥ	卯	取	賀	城)	取	崎	取	山	重	取	山	

虚と実も承知していて一つ屋根	実らせ給えと焼酎飲んでいる	ブログ初夏青い果実のパスワード	十割の努力固めた実を投げる	きっと実る前頭葉の淡い夢	色付いた実から摘まれるいちご狩	名もなきも名もなきままの実を残す	実らない部分にばかり水が行く	青い実のままで冒険から戻る	実だくさん汁も小言も母の味	種のない実で生産性のないやつだ	生きている実感寝不足がつづく	今やっと亡父の小言が実を結び	みか月を実らせ逝った人偲ぶ
内田	新家	小谷美	藤井	杉山	才木	倉下	森山	真島久	永見	真島業	藤村	田中	岸
厚子(島根)	完司(鳥取)	小谷美ッ千(鳥 取)	智史(岡山)	静(岡山)	八郎(長崎)	真澄(石川)	文切(沖縄)	真島久美子(佐賀)	心咲(岡山)	真島美智子(佐賀)	容子(石川)	敬子(広島)	桂子(島根)
実力は出し	《軸吟》	修羅いく	<b>天</b>	被爆者の	地	焦燥の叫	<b>~</b> 人 <b>~</b>	核を棄て	虚と実の	ナイアガ	実印とま	天坪の東	~ 客
実力は出し切りました悪知恵も	~	修羅いくつ越えて実った金字塔	~	被爆者の実話激しく胸を打つ	~	焦燥の叫び椿の実が固い	~	核を棄てない現実の虚しさよ	虚と実の狭間で揺れる胸のバラ	ナイアガラ実は地球の呼吸音	実印と妻がわたしの守り神	天坪の平衡やっと恋実る	~

実山椒亡母のボレロが近くなる・	回虫に効く実山椒亡母想う	木の実たわわ動物たちのお祭だ	実あれば虚もある二人夫婦です	今すぐに実る汗などないだろう	梅桜ワタシ好みよ花も実も	実の成る木植えて小鳥を呼んでいる。	花よりも食える実のなる木を植える。	名も知らぬ草の実ふかく宿る庭	実のりすぎ帰って来ない鳳仙花	塩辛い海でどんぐり立ち泳ぎ	花は実をひと科は凛とDNA	木の実降る残り時間は正確に	一	fr R
小谷美ッ千(鳥 取)	吉田 弘子(鳥取)	山下 京(鳥取)	伊藤 恒(京都)	岩佐ダン吉 (大 阪)	山本 恵(鳥取)	福永ひかり(鳥取)	成田 雨奇(鳥取)	松田 栄香(広島)	片山 玲華(岡山)	才木 八郎(長崎)	平山 三鶴(岡山)	小島 蘭幸(広島)	<b>汽</b> 車	2000年
一年の努力が実り菊花展	届かない天辺の実が気にかかる	身の丈の実りを良しとして生きる	宝石を抱く淋しさか柘榴の実	実が熟れた森の噂が風に乗る	試行錯誤やっと実った机上論	暑気払い先祖の梅に助けられ	神様の果実ときどき毒が有る	可憐な小花びっくりぽんのザボンの実	未熟さを天気の所為にする木の実	種か実か毎日食べているお米	枇杷の実の無くなる頃に鳥も消え	実だくさん汁も小言も母の味	実がなると信じ塾代下宿代	じっくりと実になる孫を育てます
伊藤 寿子(岡山)	西村 久江(鳥 取)	奥田 佳子(岡山)	板垣 孝志(奈良)	辻内 次根(和歌山)	松本 宏子(長 崎)	西川 和子(鳥取)	丸橋 野蒜(岡山)	崎山とし子 (沖縄)	森 ふみか(岡山)	野村 賢悟(広島)	石田ひろ子(大阪)	永見 心咲(岡山)	西山 竹里(京都)	大家 風太(岡山)

	《軸吟》	古久保和子(和歌山)	草の実がはじけこれから第二章
赤松ますみ(大阪)	大好きな町やまももが熟れている	渡辺 富子(奈良)	父の樹を揺すればぽとりヒントの実
	《天》	奥山 晴生(京都)	梅を干す腰を叩いて空を見て
森田 律子(京都)	ソプラノで笑ってるのがサクランボ	太田扶美代(大阪)	実を結ぶはずだと明日を待っている
	地》	渡嘉敷唯正(沖縄)	恋もまた実りの秋の贈り物
森中惠美子(大阪)	余生まだ梅もらっきょもニンニクも	西出 楓楽(大阪)	実の生らぬ木にもしっかり水をやる
	《 人 》	楠見 章子(和歌山)	自然界果実はまるいものばかり
吉野いさお(鳥取)	益荒男はピリッとせよと山椒の実	真島久美子(佐賀)	青い実のままで冒険から戻る
岡本 恵(茨城)	トマトにはトマトが出来て恙無し	上嶋 幸雀(大阪)	青い実のまま母となり父となり
小澤誌津子(岡山)	寄り添うて家族のかたち石榴の実	竹村紀の治(鳥 取)	皮も実も捧げて土になる柘榴
門脇かずお(鳥 取)	婚姻届を出しに行くさくらんぼ	八木 千代(鳥取)	始まりは実ひとつ落ちた花畑
大田かつら(沖縄)	マンゴーより熟れたアタシはいかがです	斉尾くにこ(鳥取)	色付くとふっくら笑う小さな実
	《客》	森山 文切(沖縄)	実らない部分にばかり水が行く

利発そうな脳味噌がある胡桃の実

木下 草風(岡山)

わらべうた聞こえず柿の実が太る

フラガール地域起しに燃えている	踊りたい人ばかりいる舞台うら	踊ったり踊らされたり五十年	煽てられ踊らされてるピエロです	衣紋掛け踊りの余韻覚めやらず	火の舞を演じて閉じる舞扇	輪の中に幽霊もいる盆踊り	笛吹きもつい踊り出す月の下	妻と組むラストダンスの灯は消せぬ	踊り子の幻想を追う伊豆の旅	雨を呼ぶ小鳥になった傘踊り	踊り子の品も艶やか阿波踊り	雪ふれば雪の匂いのする踊り	一路る。	<b>5</b> -
山本 惠(鳥取)	髙原かおる(鳥取)	田中 天翔(鳥取)	米田 恭昌(奈良)	古久保和子(和歌山)	才木 八郎(長崎)	橋倉久美子 (三 重)	八木 千代(鳥取)	久保田千代(兵庫)	中村 忠夫(長崎)	小谷美ッ千(鳥 取)	沢辺 亮月(兵庫)	森中惠美子(大阪)	<b></b>	
天衣無縫呑めば踊りの輪の中で	影だけが踊るギャンブル依存症	輪の中で一人踊っているピエロ	しばらくは踊ったふりをしておこう	男と女この世は仮面舞踏会	阿波踊りみんな阿呆になる至福	老人が踊る特売日の群で	九条が消えて自由に踊れない	踊るなら鷲峰山の懐で	昨日より今日を信じている踊る	踊り明かした足がステップ覚えてる	妻の掌の中で踊っている平和	軍資金不足で踊れない選挙	不器用に踊るサプリを飲みながら	威勢よく踊るが明日の米がない
大家 風太(岡山)	永見 心咲(岡山)	西川 和子(鳥 取)	岩佐ダン吉(大 阪)	牧野 芳光(鳥 取)	山岡冨美子(大 阪)	石田ひろ子(大阪)	野村 賢悟(広島)	奥山 春雄(鳥 取)	真島久美子(佐賀)	宇都満知子(大 阪)	松田 栄香(広島)	石谷美恵子(鳥取)	高田 羅奈(鳥 取)	福西 茶子(鳥 取)

最後まで踊り通したなと思う	父さんのデカパン鯉幟と踊る	トースター朝の女神が踊り出る	ゼンマイを巻くから踊らねばならぬ	もういちど踊ってみようローヒール	憧れの君へ手編みの指踊る	踊りましょう春の尻尾を捕まえて	街おこし踊るサンバに賭けている	懸命に教育学部踊ってる	踊るしかないヒマワリに囲まれて	震災を忘れニッポンが踊る	剣山の上で踊って笑う愚者	ワンルーム優雅に踊る熱帯魚	鮮やかにスマホの上で踊る指
小林 妻子(岡山)	木下 草風(岡山)	斉尾くにこ(鳥 取)	鴨田 昭紀(広島)	澁谷さくら(兵庫)	矢坂 花澄(長崎)	平尾まさと(鳥 取)	細田一三男(兵庫)	吉田孔美子(鳥取)	赤松ますみ(大阪)	西山 竹里(京都)	藤井 智史(岡山)	山下 京(鳥取)	北野 満(鳥取)
落花狼	《軸	フィナ	^	夜明は	^	スロー	^	百点	趣味	真相	吉と	素毛	^
落花狼藉北辺の地へ舞う夕日	吟》	フィナーレの海で踊っているいのち	天 *	夜明けまで踊ったバブル期の扇子	地》	スロークイックやがて一つになる命	人 →	百点が踊って帰るランドセル	趣味ざんまい踊り疲れて風になる	真相を知らず踊っているピエロ	吉と出たベリー・ダンスの鼓動かも	素手で火を握る男となら踊る	客》
(藉北辺の地へ舞う夕日		~ ーレの海で踊っているいのち 渡辺	天 》	いまで踊ったバブル期の扇子 藤村	地》	- クイックやがて一つになる命 永石	<b>∀</b> ~	が踊って帰るランドセル 伊藤	ざんまい踊り疲れて風になる 平山	を知らず踊っているピエロ 三宅	出たベリー・ダンスの鼓動かも 丸山	子で火を握る男となら踊る 岸	客》

男と女この世は仮面舞踏会	踊りたい人ばかりいる舞台うら	繋がれているとは知らずエッサッサ	蛸踊りいつか何かの役に立つ	辞令一枚他人の靴でまた踊る	不器用に踊るサプリを飲みながら	夜明けまで踊ったバブル期の扇子	いいフアン負けても踊るタイガース	最後まで踊り通したなと思う	しばらくは踊ったふりをしておこう	踊り出すスイッチ背伸びして入れる	爆音に諭吉が踊る基地の島	震災を忘れニッポンが踊る	一路る」オオ	<b>5</b> -
牧野 芳光(鳥取)	髙原かおる(鳥取)	竹村紀の治 (鳥 取)	森 ふみか (岡山)	古久保和子 (和歌山)	高田 羅奈(鳥取)	藤村 容子(石川)	前 たもつ (大阪)	小林 妻子(岡山)	岩佐ダン吉 (大 阪)	西村 久江(鳥取)	渡嘉敷唯正 (沖 縄)	西山 竹里(京都)	外夏	
踊る輪の少女の羽音聴こえだす	踊るしかないヒマワリに囲まれて	シャルウイダンス青汁のんで蝶になり	手踊りで参加してくる車椅子	いい顔でいい人間のまま踊る	顔じゃないどじょうすくいは脚である	ロボットに越中おわら踊らせる	雨乞いのみんなクラゲになってゆく	生きたいを踊るミミズも孑孑も	父さんのデカパン鯉幟と踊る	真相を知らず踊っているピエロ	踊り疲れてチョコパフェのてっぺんに	剣山の上で踊って笑う愚者	春ですよエブリバーディ踊りましょ	憧れの君へ手編みの指踊る
小谷美ッ千(鳥 取)	赤松ますみ(大阪)	楠見 章子(和歌山)	中村 忠夫(長 崎)	大家 風太(岡山)	加島 修(鳥取)	西ノ坊典子(京都)	門脇かずお(鳥取)	森田 律子(京都)	木下 草風(岡山)	三宅 保州(和歌山)	小澤誌津子(岡山)	藤井 智史(岡山)	三瀬清一朗(長 崎)	矢坂 花澄(長 崎)

箸さばきのうまさ小骨が踊りだす	ひとりでも踊る嗤われても踊る	ジョーカーが紛れ会議を踊らせる	盆踊り明日それぞれに現住所	威勢よく踊るが明日の米がない	ヒョットコとおかめでピンチ踊りぬく	百歳が踊ると透明になった	踊ってはいるどなたかのてのひらで	マヨネーズ掛けたら踊り出しそうだ	妻の笛に踊るテンポがずれている	赤い靴の魔力に負けてしまいそう	ダンシングオールナイトはもう無理だ	踠いているのかいいえ踊っているのです	素手で火を握る男となら踊る
斉尾くにこ(鳥 取)	新家 完司(鳥 取)	山田こいし(東京)	奥 正之(福 岡)	福西 茶子(鳥 取)	灰原 泰子(岡山)	萩原 典呼(兵庫)	八木 千代(鳥取)	谷口 義(大阪)	真島 清弘(佐賀)	真島美智子(佐賀)	古今堂蕉子(大阪)	松本 文子(島根)	岸 桂子(島 根)
夏の夜の夢チェンジングパートナー	《軸吟》	稲妻は闇の踊りを見たという	《天》	手足縮めて冬の時代を踊り抜く	地》	フラガールみんな綺麗に老けている	《 人 》	踊りましょう春の尻尾を捕まえて	胸に虹抱いているからまだ踊る	踊る輪の中で孤独の放し飼い	血圧が高めでワルツよりタンゴ	下克上踊る阿呆の振りをして	《客》
		板垣 孝志(奈		山本希久子(大		小島 蘭幸(広		平尾まさと(鳥	山岡冨美子(大	坂本 嘉三(神奈川	西出 楓楽(大	上嶋 幸雀(大	

アジサイの舞台で雨粒のダンス	胸踊る対決リオを楽しもう	血圧が高めでワルツよりタンゴ	ヒョットコとおかめでピンチ踊りぬく	升酒に男たぎらす山車の衆	言われれば恥も承知で踊りだす	生涯現役被災にめげずまだ踊る	官能の踊りに心乱れ打つ	パートナー貴方一人に決めました	マヨネーズ掛けたら踊り出しそうだ	いいフアン負けても踊るタイガース	夜明けまで踊ったバブル期の扇子	この世での踊り納めは春がいい	一路る」	5
大久保眞澄(奈 良)	油谷 克己(大阪)	西出 楓楽(大阪)	灰原 泰子(岡山)	吉野いさお(鳥取)	西川 和子(鳥取)	杉山 静(岡山)	岡﨑美知江(鳥 取)	松田 龍彦(岡山)	谷口 義(大阪)	前 たもつ (大阪)	藤村 容子(石川)	田中 天翔(鳥取)	<b>事</b>	
蛇皮線に思わず反応する手足	老人が踊る特売日の群で	一年を爆発させるカーニバル	きこえくるエイサー踊るシャメ届く	鬼も仏もあの世忘れて踊る盆	人間を踊り疲れてまた眠る	踊りましょう春の尻尾を捕まえて	ゼンマイを巻くから踊らねばならぬ	蛸踊りいつか何かの役に立つ	回復の兆し心が踊り出す	宿下駄のままで輪に入る盆踊り	踊るしかないから踊るフラガール	一筋の道を悔いなく踊り終え	のった風のらされた風踊りの輪	踊るしかないヒマワリに囲まれて
木下 草風(岡山)	石田ひろ子(大阪)	萩原 狸月(兵庫)	岡部良美枝(兵庫)	鶴田 遠野(大阪)	岡本 恵(茨城)	平尾まさと(鳥取)	鴨田 昭紀(広島)	森 ふみか(岡山)	内田 厚子(島根)	竹内みさ緒(兵 庫)	真島 清弘(佐賀)	奥田 佳子(岡山)	宮﨑咲貴子(兵庫)	赤松ますみ(大 阪)

百歳が踊ると透明になった	手の平で踊っただけで恋終わる	人の世を組んず解れつまだ踊る	ルビー婚妻よルンバを踊ろうか	夏祭りエイサー隊の汗被り	赤い血が流れてるうち踊り抜く	旅楽し踊る阿呆の輪に入り	初恋はフォークダンスの掌の温さ	真相を知らず踊っているピエロ	踊り終え母一条の煙となる	趣味ざんまい踊り疲れて風になる	いい顔でいい人間のまま踊る	妻の掌の中で踊っている平和	檜舞台で踊る夢持つ作句帳
萩原	渡辺	田中	小島	崎山	岸	矢坂	牧野	三宅	永石	平山	大家	松田	松本
典呼(兵庫)	富子(奈良)	敬子(広島)	蘭幸(広島)	崎山とし子 (沖 縄)	桂子(島根)	花澄(長崎)	芳光(鳥取)	保州 (和歌山)	珠子(長崎)	三鶴(岡山)	風太(岡山)	栄香(広島)	宏子(長崎)
踊り子の汗が飛び散る指定席	《軸吟》	桃色になるまで踊り続けよう	《 天 》	手も足も心も踊る退院日	地。	方言に袖を引かれて輪に入る	《 人 》	衣紋掛け踊りの余韻覚めやらず	胸に虹抱いているからまだ踊る	ふるさとの砂丘歩けば胸踊る	百点が踊って帰るランドセル	踊る輪の中で孤独の放し飼い	《客》
		,						ず	る				

甕の水こぼし諷人弥陀のもと父は胸に宇宙の入る甕を持つ	甕抱いて揺すってのたりする独り どぶろくが消えて退屈してる甕	舟唄を歌う甕なら蔵にある家族の声を毎日聞いた土間の甕女の業暗くて深い甕の底	一番にフリマで売れた祖父の甕母亡きあとの水甕がひび割れる	野みこらうこころの悪を深くして 来瓶を満たして守る亡母の汗	地球という甕があちこちひび割れる 小島
水石 珠子(長崎)		西ノ坊典子(京都) 大橋 啓子(滋賀) 富子(奈良)		を含さくら(夫事) 北野 満(鳥取)	三宅 保州(和歌山)
にこにことしてたら甕を持たされた	水甕を満たす一人のヒトとして水甕のめだか恋する花の影	満々と太平洋を溜めた甕古民家カフェ傘立てになる粋な甕磨繰りをかくした甕がある戸棚	水甕に祖母の暮しがしみついてご先祖の味噌の香りの残る甕	水悪の成故残して直木体柵という甕の手がまだ抜けぬ泥つきの甕は小判の匂いする	変からの苦情は聞いたことが無い変ひとつ転がし終の人となり
森田 律子(京都) 門脇かずお(鳥取)	真島美智子(佐賀)	古今堂蕉子(大阪) 下原泰子(岡山)	かおる(鳥	石田かろ子(大阪) 松本 文子(島根)	表 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・

ぶつぶつと甕の底から声がする	悲しみを溜める大きな甕を買う	女の業すっぽり甕に入れました	屈葬の甕に牡丹を活けている	甕に水溜める明日が来るように	水琴窟が奏でるニッポンの音色	ヨイトマケの歌こだまする亡父の甕	甕に水満たし哀しくなってくる	金と銀ふたつの甕が響き合う	うめぼしは未だに母の死を知らず	両親のふところ深い深い甕	芳醇なお酒に変えてくれた甕	大甕の底にあふれる人間味	甕の底で熟成させている秘密
木本 朱夏(和歌山)	西山 竹里(京都)	萩原 典呼(兵庫)	新家 完司(鳥取)	西浦 小鹿(鳥取)	鴨田 昭紀(広島)	小谷美ッ千(鳥 取)	畑 佳余子(岡山)	油谷 克己(大阪)	藤村 容子(石川)	字都満知子(大 阪)	細田一三男(兵庫)	奥田 佳子(岡山)	平尾まさと(鳥取)
-" -		延		上だ		2002		Lab					
ご先祖の甕を覗いたことはない	《軸吟》	甕のかたちに人間をおわります	《 天 》	大山という水甕に掌を合わす	地。》	母さんのコントが納屋の甕にある	〈 人 〉	罅割れた甕だが翼ならあるぞ	甕の中から暑中見舞が届く	粗衣粗食子孫に残す仁の甕	古備前の大甕は炎の色である	甕の底死後の世界を見ています	《客》

紆余曲折歳月語る甕の肌	古のれん受け継ぐ味は甕で生き	水甕が我が家の歴史物語る	糠味噌は甕の良し悪し気にしない	水甕に祖母の暮らしがしみついて	相伝の甕の梅酒に父母祖父母	豊作の梅の実漬ける甕を買う	伝来のぬか床甕に生きている	甕棺出土卑弥呼いずこや吉野ヶ里	甕の中弥生の匂いしてならぬ	泡盛のお喋りを聞く仕込み甕	水甕の水位雨乞いしたくなる	日の目浴び甕棺栄華語り出す	一多	_
松本 宏子(長崎)	鶴田 遠野(大阪)	山下 凱柳(鳥取)	奥山 春雄(鳥取)	髙原かおる(鳥取)	吉野いさお(鳥取)	神原日出夫(岡山)	竹村紀の治(鳥 取)	矢坂 花澄(長崎)	内田 厚子(島根)	三瀬清一朗(長 崎)	福永ひかり(鳥取)	渡辺 富子(奈良)	3 3 3	k
遠い日よ水甕満たし耐えた嫁	置き去りの甕で昭和の生き残り	贋作の甕が目利きを誑かす	三年忌甕の背中へ偲び泣く	水甕は今も生家で呼吸する	甕つくるいつかは入るカメにする	古い甕存在だけを主張する	ふくいくと梅酢の満ちる母の甕	花の性見つめ命を抱く甕	子や孫へ甕いっぱいに漬ける梅	大甕をゆずり受けてる八代目	糠床を大事に守り通す甕	縄文の甕を掘り出す竹のへら	母さんのコントが納屋の甕にある	水甕は健在森の樹を育て
石谷美恵子(鳥 取)	小澤誌津子(岡山)	中村 忠夫(長崎)	山中 康子(鳥 取)	八木 千代(鳥取)	大田かつら(沖縄)	岡﨑美知江(鳥 取)	奥田 佳子(岡山)	大家 風太(岡山)	油谷 克己(大阪)	山下 京(鳥取)	橋倉久美子 (三 重)	野村 賢悟(広島)	山岡冨美子(大阪)	上田 宣子(鳥取)

柵という甕の手がまだ抜けぬ	ねんごろに藍を醸して藍の甕	罅割れた甕だが翼ならあるぞ	三代の女の味がこもる甕	幸せに愛のあふれる母の甕	一族のルーツが眠る甕の底	甕に水あふれて幸せに気づく	注ぎこぼす愛無限なり母の甕	大がめへ亡母の糠床凛と生き	代々の甕が納戸で鎮座する	芳醇なお酒に変えてくれた甕	家族の声を毎日聞いた土間の甕	梅干の甕鎮座する母の城	水甕の満ちて平和な日が続く
真島 清弘(佐賀)	牧野 芳光(鳥取)	森山 文切(沖縄)	岩佐ダン吉(大阪)	若林みどり(鳥取)	古久保和子(和歌山)	岡本 恵(茨城)	杉山 静(岡山)	平山 三鶴(岡山)	久保田千代(兵庫)	細田一三男(兵庫)	大橋 啓子(滋賀)	奥 正之(福 岡)	西川 和子(鳥取)
甕の水こぼし諷人弥陀のもと	《軸吟》	甕のかたちに人間をおわります	《天》	父は胸に宇宙の入る甕を持つ	《 地 》	甕に水溜める明日が来るように	《 人 <b>》</b>	<b>諷人の甕にあふれた敗けぎらい</b>	悲しみを溜める大きな甕を買う	両親のふところ深い深い甕	水甕を心の中に持っている	ひび割れた甕にも父の忍の跡	《客》
		森中惠美子(大阪)		西出 楓楽(大阪)		西浦 小鹿(鳥取)		小林 妻子(岡山)	西山 竹里(京都)	宇都満知子(大阪)	真島美智子(佐賀)	田中 敬子(広島)	

沖縄の先祖が眠る厨子の甕	甕の中おいしい夢を見ています	ひと言に亀裂が走る甕の底	戦いに甕が味方をしてくれる	雑魚の声溜めて弾ける甕の蓋	覗かないで水琴窟の甕だから	甕は宇宙亡父の傘を真ん中に	悲しみを溜める大きな甕を買う	水甕の水位雨乞いしたくなる	地球という甕があちこちひび割れる	一番にフリマで売れた祖父の甕	ポトポトと水甕あふれ母の城	甕に水溜める明日が来るように	一変し	「選ーノブ
渡嘉敷唯正(沖縄)	加島 修(鳥取)	山本希久子(大阪)	西村 久江(鳥取)	竹信 照彦(鳥 取)	森田 律子(京都)	小島 蘭幸(広島)	西山 竹里(京都)	福永ひかり(鳥取)	三宅 保州(和歌山)	吉田孔美子(鳥取)	若林みどり(鳥取)	西浦 小鹿(鳥取)	7	子 選
ぶつぶつと甕の底から声がする	熟成の意見が甕にたまってる	悔いのない等身大のカメつくる	おいしかったな甕に仕込んだ祖母の味噌	甕に水あふれて幸せに気づく	ねんごろに藍を醸して藍の甕	甕達もそれぞれ余生送ってる	舟唄を歌う甕なら蔵にある	ゆっくりとして良いですか君の甕	古い甕まつり囃子を聴いている	水甕の当番だった少年期	甕のふた開ければそこは小宇宙	定説も変えるか泥まみれの甕	古備前の大甕は炎の色である	屈葬の甕に牡丹を活けている
木本 朱夏(和歌山)	岡﨑美知江(鳥 取)	大田かつら(沖縄)	宇都満知子(大阪)	岡本 恵(茨城)	牧野 芳光(鳥 取)	松永 林造(鳥取)	西ノ坊典子(京都)	内田 厚子(島根)	赤松ますみ(大阪)	前 たもつ(大阪)	毛利 由美(茨城)	中村 忠夫(長 崎)	木下 草風(岡山)	新家 完司(鳥取)

	償いの甕置いている充たすべく	門脇かずお(鳥取)	わたくしの空を育ててくれた甕
	《軸吟》	高田 羅奈(鳥取)	<b>諷人さんが甕から降らす雨のいろ</b>
澁谷さくら(兵庫)	わかちあう水はまだある甕の中	平尾まさと(鳥取)	いい仕事しても寡黙な甕であり
	《天》	森中惠美子(大阪)	非常時に大きく見える母の甕
真島美智子(佐賀)	水甕を満たす一人のヒトとして	土橋 螢(鳥取)	人間の吐息きこえる甕の中
	地。》	板垣 孝志(奈良)	水甕を涸らした晩に親が逝く
森山 文切(沖縄)	罅割れた甕だが翼ならあるぞ	成田 雨奇(鳥取)	アリババが隠れた甕がこれなんだ
	《 人 ≫	上田 宣子(鳥取)	熟成はそろそろ甕がよく笑う
真島久美子(佐賀)	甕棺の中でウインクしています	小澤誌津子(岡山)	糠床の甕のつぶやき聞き洩らす
斉尾くにこ(鳥 取)	甕の底死後の世界を見ています	島尻 卓(沖縄)	かくれんぼ陶器の甕は温かい
山岡冨美子(大 阪)	甕に水わたしに友と本がある	小林 妻子(岡山)	
藤村 容子(石川)	うめぼしは未だに母の死を知らず	太田扶美代(大阪)	涙入れると笑顔返してくる甕よ
真島 清弘(佐賀)	逆立ちの甕が出番を待っている	谷口 義(大阪)	詩人だった一日甕を覗いてた
	《客》	西原 艶子(鳥取)	梅の甕のぞけば私のような梅

中原諷人 遺句集



b の凄く生きたくなっている呼 吸

番重い水甕だいて生きている

花になり実にな ŋ 踊 ŋ 抜く 系譜 行の詩人に長い旅がある

強かに生きる三重苦もいのち

酸素携帯旅人の絵となりぬ

夏がくる夏の暑さが挑ませる

生きて今あり黄昏れた身を憶う さくら櫻これから笑う花 未 生

長 生きをさせる 縁 0) 下のちから

油 断 午 後 W よ () よ 転 š 日 が 増える

忍という眉 毛 9 ぼ ん 抜 け 落 ち る

幸せをつまむ箸にほんでつまむ 浮き草や稼ぎにとどく根が生えぬ

せんべいを撒く寝言ではない 祝 (V

滅 ぶもの の声 を 風 に は 任 せ な W

追いかける吾が人生に不等式

金封のきずなに筆の濃い薄い

何の予告か西空に星うるむなり

孵 卵 器や友しゃべっても脅しても ふたり居て二人の世界くちびる二つ

百八つ打つ鐘楼に走りこむ

過去流る病妻に夏夕立がくる

夏きらら生命線のキャタピラで

再燃の今は悔いなき道づたい

内平らかにして雪が降る 雪は 止 む

夢百やあやして母の まんまるし

ひとの背に安心感を 組みたが ŋ

あまえてはいかんと余情ぶっつける

気忙しく振る舞うように生まれた ŋ

実生から呆然とする樹に太り

根性をきざむ大きな屋根の下

どこへ行く少年少女さくら花

ざわざわ 風 に 揉 ま れ た ŋ 噛 ま れ た ŋ

喝采は要らぬとマナー識る櫻

枝 垂 n ゆ く梢 になりきって揺 n る

次 0) 間へ向け て髭 根 B 樹 0) 枝 \$

風の吹くたび風を呑み込む袋

千編の詩に千編の風がある

水汲んでやれば萎 れ菜にもいのち

この辺で黄ばんだ本を読み返す

やっと呼吸させてもらえる縁の下

あたらしい土を憶えた杖の 繙といてみても杖つく音がでる お ع

介添えはレモンにカボスどちらでも

腹 式呼吸している大仏さんの前 ふらりふらふら老境をよろけたり

往く背なに太陽のこえ人の声

大急ぎ小急ぎいのち僕のもの

いつからか防 御 姿勢の癖をも 今いまに霞の中の弱者たち

朝という粉ふりかけてきた齢

生きている小劇場を演じてる

不寝番ひたむきな 画を 護 ŋ た (V

ッと息呑む愛という温さから

ほ がらかを演じてみるか ぽ んの杖と霧中に紛 れこみ 深呼 吸

あ 0) 実 が 欲しや高 V 処 に 熟 れ て (V る

生 き た いと告げて (V る 売 ŋ 声 が は ず

む

恋心まだあり髭を剃り落とす

いっきに喋り 喉の 痺 れを地にかえす

海 あおく裏 動脈をふるさとに

少年に 郷 は 狭 いの かもしれ

ぬ

聞 き採ってあげ ね ば 無駄 な 声 に なる

みぞおちに 残 響してる生命びろ (V

どのようにしても数えておく夜だ

VI のち在りフルーツの樹にぶらさが る

の宵の声もいのちを惜しむなり

母という樹液を涸らして はい な V

真ごころを羽 織って今日 の 樹 0) か た ち

疑わぬことよ宝がたんとある

おたがいの慰問袋が笑い合う

宿命と言えど意を突く杖をつく

お かげさまで果実を輝かせている

B

世 辞ひとつ零してくれる 愉 快 犯

今にして母の膝がしらが熱い

縁の下から煽て屋の声がする

元気なら嬉しい数も多かろう

火ばしらや二言を放つ気など無し

ひぐらしの杖を鏡に拾わせる

進化して老人という花になる

とこしえに誓う大きな声ふたり

実像も影も酸素のうたが好き

夢 幻 劇いつしか杖に凭れたり

群 がらかな貌パノラマに賑やかく れ集うかたちに夢を企てる

ほ

天寿ざわざわ 芽 0) 醒めてくる櫻

限

界もまだ踏

ん張ってみたくなる

ひたむき辿り今年の 線 描 画

はなむけを遷宮にして神の森

ぼ بح ぼ とと零し人 間 が 夕 暮 n る

杖 いっつ ぼ 2 歩 け 歩 け P 隣 り合う

杖いのち人間界の扶助となり

長らえて秋の味また冬の味

() のちある本 望 0 絵 を 描 (V て V る

資しの密かなちから秋野菜

三者三様に点滅するいのち

ゆ る やかに語らせている 走馬 燈

サ ービス 判 ほ どの余命を 重 んじる

炎えている諸君を偲う彼岸花

ゆ る B る ع 無 邪 気 還る 老 (V 境 地

11 0) ち断つこと載せ たが る 欄 b あ る

耳ピーンと獣は過敏症ぐらし

(V ね () に 刻 む 人生で は ない か 担う名は一生涯の花でいる

箸が転ぶもクスクスと女神仏

こころざし 高く耕すことが好 き

誰のためにも誠実な櫻なり

火を焚いてヒ 1 科も草も芥になる

右ひだり脳いっぱいに在る秤

合掌や畏敬の念を抱きしめる

夢一つふたつ磁針の指す彼方

殺生や鶏冠の怒り冴えわたる

根元から瞬発力を念ってる

せせらぎのドレミを歌い 柳 0 芽

の仲を疑うもなくヒト 科の 炎

年輪の層から洩れてくる呼吸

雪掻いて儚 (V もの よ 通 りゃんせ ばさの下に抱き占めて いる本 音

謙 遜 0) 五体しっかり生きとうて

多勢に無勢それでも太陽

はの

ぼ

る

この 世から笑う醍醐味ではない か

黄昏の炉心に無理強いは困る

かたつむり仏の腕を慕いおり

蒼 天 に恥 じるもの 無く 喋 ŋ 繰 る

火の章の弱らぬうちと急いてい る

首を洗って崖らしい崖になる

恍惚の底に沈んでゆく情け

ふり向くも先を診て往くにも苦界

夜明けきて俗世に生きる音がでる

出 し惜しみしながら遭う 馬 力

各界に放つ笑がおの多種多様

しっかりと個展の貌になっている

え突くも仏ごころを無としない

洗 面 0) た び に 浄めて (V る 身もと

来 堪えては怺えて凭れあう夫婦 世まで杖曳くおとがついてくる

陽 を 芯 に果 実 0) 笑 いごえがする

こと

ほぎの

福

茶それ

か

5

裏

切らず

花 を狩 る 花ア ル バ ムの 旅 まくら

平熱になるまで解いてきた真偽

のこる文のこらぬ文も人が描く

えんぴつの影をもらっているロダ

異端児と名乗り優駿とも名乗る

還暦の春をもらっているうふふ

いつのまに余炎を曝しばかりなる

## 来 る 秋の駒ねぎらいを念いぬく

去年今年いのちばん馬を憶うなり

五巡目の嘶き厄さらばさらば

Щ 頭火ほどに甍を飛びだせず

花 火まだ花火のままでミレニアム

五. 体まとめて人となり樹ともなる

還 暦 P 、気力 0 失せる 樹 で は な (V

にんげんと云う折 ŋ 紙 に 苦労す る

地 を 掘ってゆ く根 0) は な 樹 0) は な

やっとこさ杖つく音も新世紀

他愛なく次の間に人の児ねむる

桃 0) 木 は桃の産毛のことおもう 不用意に走れば石に侮られ

ポケ トを逃げた W 夜叉 0) 財 布 持

ん底の生活へ化粧など いらぬ

一燈も明かい嵐として点す

小 説にすっか り似せて生き返る

寿 命とや狭き菩 薩 の手の ひらで

ひな祭り女おんなの海およぐ

焼 けした亡父の愛読書 が 読 め た

流され た時 間 に 僕 が 浮いて た

青空に申し 訳ない 愚痴落とす せん抜きを持って命の水に逢う

男泣きしても雛まつりが遠い

返 信に 他 力 本 願 と は 書 け ず

永 代 供 養 は 桜 0) 木に 手 向 け

楚 鐘 0) 響きサクラ の身 が 火 照 る

相合い傘の骨繕って夫婦老い

骨 組みを変えて愛の 巣温うなり

復 信に老母のことだけ案じとく 新緑の神の森には逆らわぬ

ダ メ押 の 指 切 ŋ 花 0) 種 とする ゆびきりの指を守って燕来る

屋根五つ重ね平和の塔そびえ

鴉啼く屋根で鬼瓦とならぬ

笹舟の緑を海へ向けて旅

S まわりが 枯れ ぬ 画 廊の 春のど か

恋人に逢う日画廊 のピカソです 約東の一つどこかで風になる

いのち鮮やか階は天を突く

靴 鳴って答辞のあ ح の揚げ 幕 P

画 廊 からキリ ス 1 0) 髭かぞえてる 旅帰り迎えて神の膝まくら

夫 婦 0) 煩 悩つなぐ糸縒 ŋ 機 古 風な けもの亡父への思慕 と足 跡 ح

92

咲 か ぬ 樹 も晩年やがて憧 れ に

真夏日や紫 紺の茄 子の処 方 箋 病 窓 P あ 0) 黒百合を毟らん か

連 れ添うてこころの 凪 を 判り会う

平凡に生きる囮よ薬ゆび

げんまんの男の箱に妻と子と

還暦のその後からは母らしき

ほ ほ 笑 みの返 礼は母にだけとする

哀しみを消してくれてる添うてい る

記念日を担う薬指よ夫婦

申し分 0) 無 (V 囲 いと は母である 種 も仕 掛け も母を見習うことで

な に 喰 わ ぬ顔 して甘 v 鬼 ばか ŋ

滞空や恋の紙ヒコーキ飛んで

喫煙は卒業いのち惜しむなり

自画 像の今を仕上げる筆づか (V

尽きるまで喋り酒盛る男たち

若いとて道化にもなる呼 吸を吐く

わ がままな円に魅かれることがない いのち腕に喪の章 からみつく

ふるさとの涅槃の像に変わりなし

貯えた知恵の発芽に暇が要り

いつとなく脳も嵩張るもの捨てる

末永く神楽の鈴の謳うなり

秋 暁の 励ましがあ ŋ 阿 修 羅 あ ŋ

麓まで潤う峰の深呼吸

反戦のちから大嘘には負けぬ

化石の 歯じっくり生きろいきろとや

勤勉な窓を憶えている櫻

万象のどれも小嵐大嵐

茶筅わさわさ太閤の赤い傘

手を組めば胸が呟くありがとう

こんなにも命乞いした灸の痕

消 印 黒 々愛を秘めてた ح は 知らず 杖 の苦 を 知っ て v る から 歩 が 揃 う

弧 を 描 < 針 0) 海 か 5 抜 け 出 せ ぬ

荒む私語ボトル枕にして鎮め

蝉 しぐれ児を抱く夢を連れてい た

盲目の恋で梵鐘溶かすかな

力 リエスの背なをランドセルが 摩 る

障害の壁を十指で和ませる

福 祉切 り捨て陸の孤島で杖が哭く

壺 0 底 か 5 喉 ぼ と け まで愛を積 み

弾 丸こめる 女 分 間 0) 隙

優 感 触 母 0) 乳 房 戱 れ

る

善となるはなし滴る木の精

石垣をつたえば私まだ伸びる

反核ヘドームを晒す月の青

頭 脳ま だ撓むちからの森であり

一つずつ落として勝ち組の砦

いにしえの 和 歌に も秋の 濃く淡く 学問を奨める迂回路へ連れる

ふるさとを気遣う化身でもする か

封印のこと責任の朱をのせる

動脈のタービン通う赤い川

動乱のはなしも啓蟄の二月

傍らの菩薩ごころが気を配る

古稀 いう旅 の まどろみ 車椅 みじみと懐 古させるか 石舞 台

紙に字の整うまでは難儀でも

斬 新 な 画になる 僧 の 数珠さば 3

靴 下も拾ってくれるベッ F 0) 手 空白を 埋めんとすれ ば 知 恵 が 要 る

皆さんに扶けてもらい 櫻 0) 樹

愛を意味するプレゼント 何度でも

お気に召す詩人となれぬ 日が 流 n

透析の赤い流れに在るいのち

龍笛の音も出て来る呼吸法

わ す れ 8 0) 無く前向 き 0) 沓 が 鳴 る

臍という尊い場所に油断せず

誇らし ゅう枝 垂れ 櫻 の笑 いだす 摘花してやれば明日も美しい

亡母の霊前へ五句

年 輪の 数ねぎろうて樹をさする

疲 労 困 憊 また今 日 0 筆 0) 跡

因

縁の 世に歓びの花ひらく

0) 数珠に縋っている祈 ŋ

しまれ つ牡 日丹芍薬 バラ 0 花 首

夕焼ける森へ翼の子守り唄





























## 御礼

お願いを致しました。選者の先生方も諷人と縁の深い方々にお願い致しました。 会長とご子息の文切さんから、諷人を偲んで追悼誌上大会をしてはとの打診があり、 諷人が世を去って三年、何とか諷人の句をまとめなければと思っていたところへ盛桜 初めての試みであり、どの位の方々に参加して頂けるのか不安もありましたが、北海

道から沖縄まで多くの皆様に投句して頂きました。そして多くの封書の中に、温かい

励

ましのことばが一筆したためてあり、深い絆を感じさせて頂きました。

おり、今年も見事に咲いてくれました。鹿野へお越しの際は是非お立ち寄りください。 家族三人でその樹を撫でては頑張れよと声を掛けたものです。東屋の前で元気に育って あった時、自分達には子供がいないのでと仲間に入れて頂き、諷人桜と名付けて、毎年 句を拾い集めていると、やはり桜の句が多くあり、又、諷人の喜怒哀楽がひしひしと 諷人はことのほか桜が好きで、鹿野町の城山公園に枝垂れ桜の植樹希望者の募集が

一言頂いております。特に日枝子さまには夜遅くにも拘らず愚痴や悩み事を聴いて頂い

ていたようです。

を掛けて頂きました。天国で栞先生、薫風先生、紫香先生、鬼遊さま、メ女さま、そし て多くの皆様と賑やかく川柳談義をやっている事でしょう。 どの会場へ行っても、「ふうちゃん、諷人君、フウジンさん」などとあちこちから声

きて行きます。お世話になった皆さまへ感謝感謝の気持ちでいっぱいです。 母(汲香)と三人で各地の川柳大会へ、家族旅行として参加した事を心の糧として生

お世話頂きました。又、表紙と挿し絵のデザインは、鹿野中学校川柳クラブの卒業生で、 印刷は、みか月発足からお世話になっているタクミコーポレーションの湯ノ口社長に

か月の皆様、川柳塔おきなわ準備室様に心より感謝申し上げます。 大阪在住のイラストレーターひやまちさとさんにお願いしております。 全国から投句頂いた川柳作家の皆様、お忙しい中無理をお願いした選者の先生方、み

ありがとうございました。

平成二十八年九月

中 原 みさ子

## 昭和六十二年七月

昭和五十九年四月 昭和五十七年七月 昭和五十六年二 満三歳時 昭和十七年生まれ 脊椎カリエスを病む 本名

中原輝 彦

諷人

略

歴

鹿野中学校卒業

鳥取商業高校卒業 東京経理専門学校修了

昭和四十一年九月 昭和四十年三月 昭和三十七年三月

月 株澤田商会転職 澤田設備工業株入社

昭和

四十三年

同社退職

昭和

五十一年八月

昭和四十五年三

月

昭和五十一年八月

昭

和

五十三年四月

同社退職 有芝岡商店入社

鳥取県川柳作家協会登録 みか月川柳会事務局長 鹿野町川 柳教室入会

昭和五十五年七月

月

鳥取文芸協会会員

昭和 昭

五十五年六月

和

五.

·四年十二月

川柳塔社同人 川柳塔社誌友

鹿野中学校川柳クラブ講師

平成二十五年四月二十七日 没

126

## 中原諷人追悼誌上大会・遺句集

(非売品)

2016年9月25日発行

発行所 川柳塔鹿野みか月

₹689-0423

鳥取県鳥取市鹿野町中園180

森山盛桜

電話0857-82-1491

協 カ 川柳塔おきなわ準備室

表紙デザイン ひやまちさと(出身 鳥取市鹿野町)

印刷 (有)タクミコーポレーション

〒680-0911 鳥取市千代水 1 丁目85 電話0857-24-6288